國學院大學学術情報リポジトリ

Giraldus Cambrensis and his trouble with his nephew(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000991

〈論説〉

ギラルドゥス・カンブレンシスと「ブレコン大助祭問題」（Ⅰ）

永　井　一　郎

要　　旨

ギラルドゥス・カンブレンシスは1198年から1203年にかけて，所属するセント・デイヴィズ教会の権利拡大を求めてカンタベリー大司教ウォルターと争ったが，これに敗れて大助祭を辞任させられた。ただ，その際大司教との間で，彼の甥で同名のギラルドゥスが後継者となり，自分は大助祭の職禄の一部を引き続き享受できるという約束を結んだ。

しかし，数年も経ぬうちに，甥は叔父ギラルドゥスにその取分を手渡さず，しかも，ギラルドゥスには職録を要求する権利がないという主張を繰り返すようになった。当然ギラルドゥスはこれに反論し，甥と彼を支援する人々に非難の手紙を送った。論争の開始である。本稿はこの論争を「ブレコン大助祭問題」と名づけている。

ギラルドゥスは論争を仕掛けただけでなく，自分が送った手紙を集成して著作『二人の鑑』を書き上げた。そこで彼は自分の要求が正当なものであり，反対に甥の言動が正義や倫理に反するものであると強烈に主張している。

二人のギラルドゥスの間で繰り広げられた争いはなんだったのか，何を目的として進められたのか。本稿はこの点について史料に基づき検討する。

得られた結論は次の2点である。①甥ギラルドゥスはセント・デイヴィズ司教とともに隠退した叔父ギラルドゥスをウェールズ聖界から完全に排除する計画を立てこれを実現するために叔父と論争した。②叔父ギラルドゥスがこの計画に気付いた時にはすでに遅く，最終的に彼のウェールズ聖界に対する影響力は失われた。

以上から判断すると，「ブレコン大助祭問題」は，表面的には職禄をめぐる身内同士の争いに見えるが，実際には13世紀以降のウェールズが宗教的，政治的な独立の可能性を失ってゆく事件のひとつであった。

キーワード

ギラルドゥス・カンブレンシス（叔父），ギラルドゥス・カンブレンシス（甥），ブレコン大助祭の権限・職禄，13世紀初頭のウェールズ，イングランド王国のウェールズ支配

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　史料
Ⅲ　「ブレコン大助祭問題」の原因
Ⅳ　発端（以上　本号）
Ⅴ　ギラルドゥスの主張（以下，64巻3・4号）
Ⅵ　甥たちの主張
Ⅶ　結果
Ⅷ　おわりに―「ブレコン大助祭問題」

Ⅰ　はじめに

12世紀後半から13世紀初頭にかけて南ウェールズを中心に活躍した著述家ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis，本名Giraldus de Barii）は晩年になってきわめて不愉快な事件に巻き込まれた。この事件は1208年に発生し，その後数年間彼を悩まし続けたが，彼はこれをきっかけに大きな著作『二人の鑑（Speclum Duorum）』を書きあげた(1)。以下本稿ではこの事件を「ブレコン大助祭問題」と呼ぶことにする(2)。なぜひとつの事件を「問題」と呼ぶのか，その理由は本節で順次明らかにする。

本稿は2つの目的をもっている。ひとつは「ブレコン大助祭問題」がどのような内容をもち，どのように展開したか，史料に基づき確認すること，もうひとつはこの事件に先行する大きな事件，すなわち，1199年から1203年にかけてギラルドゥスが全力で取り組んだ「セント・デイヴィズ（St. David's）問題」(3)とどのような関連をもっていたか究明することである。2つの目的は，一般的に言えば，前者の確認がなされて後者の検討が可能になるという関係にあるが，逆に，後者の解明によって事件の隠れた意味が明らかになり，それを踏まえて前者が再確認される可能性もある。以下2つの目的について，後者，前者の順に説明しよう。

第2の目的を説明するためには，本稿の唯一の史料『二人の鑑』がこの事件

をどのように伝えているのか簡単に紹介する必要がある。この著作はギラルドゥスの手紙10通を集成したもので，1208年に書き始められ，数年間加筆が続けられた。手紙のあて先は彼の甥で当時ブレコン大助祭であったギラルドゥス（Giraldus de Barii），セント・デイヴィズ司教ジョフレイ・ド・ヘンロウ（Geoffrey de Henlaw，Galfridus de Henlaw），南ウェールズや国境域の聖職者など多様である。「ブレコン大助祭問題」（以下，誤解の恐れがない場合は，「問題」と略記する。）に対する彼らの立場も当然多様で，甥ギラルドゥスと司教ジョフレイは当事者であるが，各地の聖職者の中には「問題」と無関係な人も含まれている。文面は相手の立場に応じていろいろであるが，全体に共通しているテーマはブレコン大助祭職禄をめぐるトラブルであり，ギラルドゥスは甥とその支持者たちの言動を非難しながら自分の権利を強烈に主張している。

『二人の鑑』が表面的に伝える事件の構造は比較的単純で，対立したのはギラルドゥスと甥，対立の焦点となったのはギラルドゥスにブレコン大助祭職禄の一部を享受する権利があるかどうかであった。事件は小さな利権をめぐる肉親間の平凡な争いのように見え，「セント・デイヴィズ問題」のように民族独立といった大義を読み取ることは難しい。全体として著者の感情が前面に出ていることもあって，ギラルドゥスが小さなことで感情を爆発させているという印象すら受ける。

おそらくこうした印象に引きずられてであろう，これまでの研究者は「問題」やそれをめぐるギラルドゥスの記述を軽視してきた。本格的な研究は1点，すなわち，『二人の鑑』校訂本に付された編者リヒター（M. Richter）の長い序論だけである(4)。本稿は史料，内容いずれの面でもこの校訂本に大きく依存している。

ただし，本稿で以下展開する「ブレコン大助祭問題」の理解はリヒターの理解とかなり違っている。そこで，本稿の理解がリヒターを含むこれまでの研究者のそれとどのように違うのか，簡潔に述べておこう。

まず，対比のためにこれまでの理解に見られる特徴を3点挙げる(5)。

① この事件は同名の叔父と甥の対立という点では珍しいが，職禄の取り分をめぐる争いはどこにでもあり，争いの対象や地理的範囲は小さい。事件そのものは平凡である。

② 事件の内容に比して，ギラルドゥスの非難の声が高く，誇大な表現が目立つ。

③ 事件の遠因が「セント・デイヴィズ問題」の決着方法にあるのは確かだが，事件そのものは職禄をめぐる個人的な争いであって，「セント・デイヴィズ問題」とかかわらせて考える必要はない。

私はこれら3点，特に③の理解は事件の本質を見誤らせる可能性が高いと考える。この事件は「セント・デイヴィズ問題」の再版ないし継続というべき性格をもっていたと判断するのである。そう判断する理由を2つ挙げる。ともにこれから検証する論点の先取りである。

① この事件は，「セント・デイヴィズ問題」に決着がつけられた直後にカンタベリー大司教ウォルターとギラルドゥスが交わした約束，中でもギラルドゥスの処遇に関する約束に根ざしている。時期はずれていても「セント・デイヴィズ問題」がかかわっていたことを軽視すべきではない。

② 甥とその支援者たちは，ギラルドゥスが「セント・デイヴィズ問題」で完敗し，同司教区における影響力を大きく失ったことを承知していながら，さらに追い討ちをかけて彼を司教区から完全に排除しようと考え，その方法としてこの事件を利用した。彼らにとって2つの事件は密接につながっていた。

以上の推定，すなわち，『二人の鑑』が伝えている事件は「セント・デイヴィズ問題」と密接に関連していたことが史料によって確認されるならば，事件をより広い視野の中で考えることができる。まず，「セント・デイヴィズ問題」は彼のキャリア・デザインの中で重要な位置を占めていたから，「ブレコン大助祭問題」は彼が追及してきたキャリア・デザインの最後の段階と理解できる(6)。次に，「セント・デイヴィズ問題」はイングランド王権のウェールズ聖界支配と深くかかわっていたから，「ブレコン大助祭問題」はギラルドゥス個

人を超えて13世紀初頭のウェールズ聖界にまで広がる可能性をもつ。

後者について少し説明しよう。ギラルドゥスは「セント・デイヴィズ問題」で自分の司教就任と同教会の大司教座権の主張を結びつける作戦をとった。そのため，イングランド王とカンタベリー大司教ウォルターはギラルドゥスの主張を王権に刃向かう動き，特に彼らが進めていたウェールズ支配に対する攻撃と受け止めた。そこで大司教は，まずはギラルドゥスの司教就任を阻止したが，それだけでなく，彼がウェールズ聖界で保持している発言力，影響力をできる限り削ごうと考えて策略を重ねた(7)。結果は大司教の勝利であったが，ギラルドゥスの力はひとつの敗北だけで消滅するような根の浅いものではなかった(8)。「セント・デイヴィズ問題」後も大司教の懸念は残っていたはずで，これが数年後の事件，すなわち「ブレコン大助祭問題」を生み出した。私はこのように考えている。

「ブレコン大助祭問題」でギラルドゥスと対決したのは彼の甥ギラルドゥスとセント・デイヴィズ司教であり，カンタベリー大司教は背景に退いている。しかし，彼ら，特に大司教の側近であった司教がギラルドゥスに対する大司教の懸念を知らなかったはずはない。司教は大司教から指名，聖別を受けており，その際ギラルドゥスの処遇について両者の間に充分な意思疎通があったと考えるのが自然である。ギラルドゥスをウェールズ聖界から排除できれば，大司教にとっては懸案解消となり，司教にとっては司教区管理について先輩ギラルドゥスから忠告や助言を受ける煩わしさがなくなる。甥は，大司教から直接指示を受けた可能性は少ないが，ブレコン大助祭としてセント・デイヴィズ司教に仕えたから，ギラルドゥスに関する上司たちの意向を会得するのにさほど時間がかからなかった。しかも，ギラルドゥスを排除できれば，甥は大助祭の権限と職禄をすべて自由に享受できるようになる。

ブレコン大助祭の職禄分配をめぐる事件が上記のような関係の中で発生したのであれば，これは，表面上は大助祭職禄をめぐる肉親間の争いのように見えても，ウェールズ聖界に影響を及ぼす問題，さらにはイングランド王権のウェ

ールズ支配にまでかかわる問題だった可能性が高い。このように考えて，私は『二人の鑑』の主題となった事件を「ブレコン大助祭問題」と呼ぶことにしたのである。

本稿の第2の目的に比べると，第1の目的に関する説明，すなわち，「ブレコン大助祭問題」の経過確認を目的として掲げる理由は簡明である。一般的に言って，ひとつの事件があってそれに関する著作が残されているのであれば，経過確認の作業は比較的容易なはずで，わざわざ論文の目的にあげる必要はない。本稿が「問題」そのものの確認を目的としたのは，手がかりとなる唯一の史料『二人の鑑』が，事件の記録としてみた場合には，かなり特異な性格をもっているからである。

具体的な内容は第2節で紹介することにして，ここではいくつか特徴を挙げておこう。①著者であるギラルドゥスは「問題」の一方の当事者である。②『二人の鑑』の中心部分はもう一方の当事者である甥宛に書かれ，他の部分も何らかの意味で「問題」に関係をもつ人に宛てて書かれている。③大部分の紙幅が敵方の言動を非難し，改善を要求する文章で占められている。④送付先が知っていると判断した事項については示唆程度の言及しかなく，充分な内容説明がなされていない。⑤言及された出来事がいつ発生したのかほとんど記されていないので，多くの出来事を年代順に配列することが難しい。

こうした特徴をもつ著作の場合，記述から個々の出来事とその関係を正確に読み取ることは難しい。『二人の鑑』の読者は，全体としてどのような出来事がどのような順序で発生したのかよく分からぬままギラルドゥス一流のレトリックを駆使した文章を追うことになる。当然この著作中の文章をそのまま史料として利用しようとしても得られる情報は断片的となり，ひとつのまとまった画像にはならない。実際，先行研究者でただひとり「問題」の経過を追っているリヒターも，事件の発生が1208年だったことは間違いないが，それ以後の経過を具体的に述べるのは難しいと言っている(9)。研究の前提となる事件の経過がまだ確定されていないのである。とすれば，私が自分で「問題」の展開を

探るほかない。ラテン語読解力の不足もあって私の手に余る作業となるだろうが，本稿ではリヒターと少し違った方法で「問題」の経過を追ってみたい。その方法の説明は第 2 節で行い，具体的な作業は第 4～第 6 節で進める。

これまでの研究者は私が「ブレコン大助祭問題」と名づけた事件についてどのように考えてきたのであろうか。ここでは事件について言及している研究者を中心にギラルドゥスの晩年について記している文献を，私の知る限りすべて取り上げて個別に説明しよう。上で研究者全体に見られる特徴的な理解を紹介したが，以下はその具体例に当たる。

オーウェン（Owen, H.）はギラルドゥスの伝記『ウェールズ人ジェラルド(Gerald the Welshman)』で彼の晩年期にかなりのスペースを当てているが，直接「ブレコン大助祭問題」に触れた箇所はない。オーウェンが記しているのは次の 4 点のみである[10]。

①「セント・デイヴィズ問題」で敗北したあと，ギラルドゥスはブレコン大助祭の職と職禄を甥ギラルドゥスに譲った。②その 2 年後彼はローマ巡礼に出かけ，教皇インノケンティウス三世に自分が得た地位と権限をすべて返上すると述べたが，彼の申し出は受け入れられなかった。③1207 年以降彼はリンカーンで完全な隠遁生活を送り，新しい聖職就任の話があっても応じなかった。④彼はおそらく 1223 年に死去した。

この書でオーウェンは，生涯を通じてギラルドゥスが私利に固執しない立派な聖職者だったというイメージを作り出そうとしており，①～③はこのイメージを支える言行である。

リヒターは論文「ジェラルド・オヴ・ウェールズ（Gerald of Wales）」の中で，「問題」に触れているが，以下の点にとどまっている[11]。

①甥は自分が継承したはずの大助祭職禄の一部をギラルドゥスが辞任後も保持していることに腹を立て，これを取り返そうとした。②ギラルドゥスは甥の主張は不当であると抗議したが，聞き入れられず，不利な状況に追い詰められた。③当然彼は不満をもち，これが『二人の鑑』を書く動機となった。

リヒターの主著は『ギラルドゥス・カンブレンシスーウェールズ民族の形成(Giraldus Cambrensis — The Growth of the Welsh Nation)』であるが，ここでは「セント・デイヴィズ問題」について詳細な議論が展開されているのに対して，「ブレコン大助祭問題」は触れられていない[12]。

ただし，リヒターがこの「問題」について本格的に取り組んだのは上記の論文と著作を発表した後で，その成果は『二人の鑑』の序論にまとめられている。この序論については下で細かく紹介する。

ウォーカー（Walker, D.）は，ギラルドゥスの文筆活動を論じる文章の中で，彼が著作や研究に専念しようとしていた時期にこうした事件に巻き込まれ，収入減に悩まされたのは不運だったが，形式上大助祭職を甥に譲っても付随する収入を確保できると彼が考えたのは誤りだったと述べている[13]。

カイトリー（Kightly, C.）はギラルドゥスの生涯を概観する文章の中で，彼と甥との契約は妙案のように見えるが，大変不自然なものであったから，後に甥が大助祭の職だけでなく禄をも獲得しようとしたのはむしろ自然な動きであると評している[14]。

現在のところ「ブレコン大助祭問題」に関する唯一の研究は『二人の鑑』に付されたリヒターの序論である[15]。この序論には史料の説明や分析だけではなく，本文の内容に関する解説が含まれている。そこで，リヒターが「問題」の経過をどのように整理しているか簡単に紹介しておこう[16]。

①「問題」の原因。1203年にカンタベリー大司教ウォルターは「セント・デイヴィズ問題」に決着をつけるためにギラルドゥスと約束を交わし，形式上ブレコン大助祭を辞しても，実質的にギラルドゥスが同職の権限と禄のかなりの部分を保持できるよう取り計らった。そして，この「約束」を形式面，実質面のどちらで理解するかが「問題」の争点となった。

②「問題」の発生。ギラルドゥスはアイルランド，ローマへの旅を終えて1207年末にリンカーンに居を定めたが，間もなく自分の留守中に甥とその補佐役のウィリアムが利己的な行動をしていたことを発見し，これは大司教と自

分の「約束」（以下，「約束」と略記する。）に反する行為であるとして甥を強く批判し始めた。ただし，彼の主張は「約束」の非公式な面のみを前提としており，甥が公式的理解に基づく論拠をもっていることを無視した。同じ「約束」を論拠としていても両者の理解はまったく違っており，これが妥協の余地なき対立を生み出した。

③ 非難の応酬。ギラルドゥスと甥はそれぞれの「約束」理解に基づいて一方的に自己主張し，相手の非を周囲の人びとに訴えた。ただし，両者が直接会って議論する場がつくられたわけではなく，それぞれ自分に味方してくれそうな人びとを個別に説得した。また，自己主張のあまり表現が誇大となる場合が多く，泥仕合の様相を呈するまでになった。

④「問題」の終結。ブレコン大助祭区を管轄下におく司教ジョフレイは甥に味方して「約束」を形式面で理解する姿勢をとり，周囲の人々も同様な理解を示したため，ギラルドゥスの立場は悪化した。2011 年には争点となっていた職禄はすべて甥のものとなり，ギラルドゥスの収入は激減した。当然彼は不満をもち，それを『二人の鑑』で爆発させたが，結果は変わらなかった。

第 2 節以降の議論は上記リヒターの「問題」理解を出発点として利用している。利用の仕方は「問題」の構成要素によって違うので，そのつど説明する。

最後に，本稿がこれまでの拙稿とどのような関係をもっているか簡単に説明しておこう。

まず，ギラルドゥスの晩年期を扱っているという点で，本稿は「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン」(17)および「ギラルドゥス・カンブレンシスと『セント・デイヴィズ問題』」(18)と直接結びつく。前者は彼の生涯，特に前半生をキャリア・デザインの点から概観したもの，後者は彼の後半生を特徴づける生涯最大の活躍を紹介したものである。本稿はそれを受けて彼の最後の活動を明らかにする試みである。3 つの拙稿をあわせるとギラルドゥスの一生がカヴァされる。

次に，上で説明したように，「ブレコン大助祭問題」は「セント・デイヴィ

ズ問題」と深くかかわっている。少なくとも後者の処理方法が矛盾含みで，当事者の理解や要求にずれが生じたために前者が発生したという関係にあり，加えて，後者の最終的決着が前者によってつけられた可能性が高い。「セント・デイヴィズ問題」は1203年の「約束」によって完了したのではなく，「ブレコン大助祭問題」に形を変えて続けられたと言ってもよいであろう。その意味でも本稿は「ギラルドゥス・カンブレンシスと『セント・デイヴィズ問題』」の続編である。

Ⅱ　史料

「ブレコン大助祭問題」に直接言及する史料はギラルドゥスの著作『二人の鑑』のみである。他の事件関係者はまったく記録を残さなかったと推測されている(19)。このように孤立した史料であるため，『二人の鑑』の記述に対するクロス・チェックはほとんどできない。

『二人の鑑』は中核部分と付属部分に分かれる。前者はギラルドゥスが甥に宛てて書いた長い2通の手紙であり，後者はギラルドゥスがその他の人々へ送った8通の比較的短い手紙から構成されている(20)。

ギラルドゥスは1208年に『二人の鑑』中核部分の基となる2通の手紙を甥に宛てて書き，その後おそらく1216年まで加筆を続けて今日の著作をつくり上げたと推定されている。始期は同書中の言及から逆算した推定であり，終期の推定は，同書が1216年完成の『論駁（De Invectionibus）』よりも後に書き終えられたと分かっていることに基づく(21)。

現存マニュスクリプトはヴァティカン図書館所蔵のCodeces Reginenses Latiniに含まれるMS. 470のみで，『論駁』に続けて筆写されている。リヒターは，このマニュスクリプトが作成されたのはリンカーンで，その後複数の手を経てヴァティカン図書館に購入されたと推測している(22)。現存マニュスクリプトには多くの筆跡が見られ(23)，ギラルドゥスの自筆写本でないことは確

実である。しかし，どの筆跡も13世紀第1四半期に属しており，ギラルドゥスにごく近い時期，具体的には1216年から1225年の間に筆写されたマニュスクリプトであると推定されている。また，大きな欠落部分はない。したがって，現存マニュスクリプトはギラルドゥスの原文をほぼ正確に伝えている可能性が高い。

『二人の鑑』の中核部分を構成する2つの手紙は，上記からわかるように，ギラルドゥスが実際に甥に送った手紙をそのまま写したものではない。実際，校訂本に載せられた2通はそれぞれ38ページと39ページ分を占め，手紙としては異常に長い。ただし，2通とも手紙の形を借りた創作ではなく，それぞれの原本である通常の短い手紙が甥に送られたことは間違いない。この原本の写しをギラルドゥスは手元に残し，これに何度も加筆して現存の長大な手紙にまで発展させたのである。

『二人の鑑』の校訂者はマニュスクリプトを細かく分析した結果，同書は4つの段階を経て作り上げられたと推定している(24)。この推定を利用して2通が現存の形にまで発展したプロセスを説明しよう。

第1は，ギラルドゥスが1208年に実際に送った手紙の写しが作られた段階である。本稿の史料としてはこれが最も重要な部分であり，以下ではオリジナル手紙と呼ぶことにしよう。

第2は，オリジナル手紙に大幅な加筆がなされ，手紙が著作に発展した段階である(25)。これをオリジナル著作と呼ぶことにする。著作への発展にともなって，想定されている読者が手紙の名宛人個人から一般の有識者にまで拡大した。

追加部分は大きく2種類あったと推定されている。ひとつは，読者の拡大にともなって必要となる事情説明である。当事者には周知のことであっても，第三者には背景も含めた事件の説明がなければ理解ができず，ギラルドゥスの主張を受け入れるはずがない。こうした追加説明も本稿に重要な情報を提供してくれるはずである。ただし，現存マニュスクリプトでは，オリジナル手紙とこ

の追加説明との区別はつかない。もうひとつは先人の著作からの引用で，その目的は自分の主張を正当化し，甥の行動や主張は正義に反することを証明することにある。引用部分は，著者の名前が記されているので，現存マニュスクリプトでも容易に区別がつく。

リヒターはオリジナル著作が一応完成したのは1208年から1210年の間だと推定している(26)。ただし，1208年の可能性は少ない。それは，ギラルドゥスが「ブレコン大助祭問題」の所在に気づいたのは1207年末だったと推定されており，手紙を送るなど自己主張を始めたのは1208年であることを考えあわせると，この慌ただしい1年足らずの間に大量の追加をして著作に仕上げるのは困難だからである。本稿ではオリジナル著作が1210年に出来上がったと想定しておく。

第3の段階は，オリジナル著作を読み直したギラルドゥスがまだ意を尽くしていないと判断した部分について別紙を用意して追記し，これを挿入した時である。この別紙追記は現存マニュスクリプトでは本文と並べて別に記されているので，判別は容易である。追記の内容は多様であるが，「問題」について新しい情報を提供してくれるものは少ない。また，別紙追記がギラルドゥス以外の人によってなされた可能性もあるが，その判別はできない。本稿ではギラルドゥスが書いたものと想定しておく。

第4は，オリジナル著作の余白や行間に追記がなされた段階である。その大部分は文脈を明確にするための語句で，追加によって記述内容が大きく変わることはない。ギラルドゥスが再度オリジナル著作を読み直す中で付されたものと推定されているが，ここでも彼以外の手が加えられている可能性は否定できない。現存マニュスクリプトでも余白や行間に記されているので，判別は容易である。

以上の説明から当然予想されることであるが，第3，第4という段階区分は必ずしも時間的順序を表しているのではない。したがって，それぞれの追記が何年になされたのか推定する手がかりはない。全体として第3，第4の追加が

なされたのは1210年から1216年の間，あるいは，彼以外の人による追記の可能性も考えに入れると，1210年から1225年の間という漠然とした推定しかできない[27]。

なお，『二人の鑑』校訂本は，オリジナル手紙とオリジナル著作との判別ができないので，区別せずに通常の活字で印刷し，挿入紙片に書かれている部分はイタリックで，その他の追記はカギ・カッコを付して区別している[28]。

ギラルドゥスはどのような意図をもって8年間も『二人の鑑』を書き続けたのか，また，各手紙の内容はどのようなものか，ここで簡単に紹介しておこう。

まず，ギラルドゥス自身が記している著作意図を紹介する。甥に宛てた第2の手紙の末尾に記されているので，『二人の鑑』全体というよりも中核部分の意図を示すものと理解するのがよいであろう。

（Ⅱ-1）「私はお前たち，教師と生徒がそれぞれの顔について，いやそれ以上に，お前たちの生来の性格についてじっくり考えることができるよう，広く大きな鑑を送ることにした。」[29]

「生徒」とは甥のギラルドゥスであり，「教師」は甥の指導・補佐のために雇われたウィリアム・ド・カペレを指す。ギラルドゥスは2人に対して，この『鑑』に自分たちの行為を写し，自分たちが誤っていることを確認しなさい，そのためにこの著作を書いたのである，と言っている。この文章をそのまま受け取れば，彼の意図は2人に反省を求め，以後正しい道を歩むよう忠告することにあったことになる。しかし，以下で紹介するように，本書の内容，表現はともにこのような穏やかな意図にそぐわない。彼の書き方は戦闘的であり，激しい非難，さらには，中傷といわれても仕方のない内容がしばしば見られる。（Ⅱ-1）はおそらくオリジナル著作が完成した時点に，著作としての体裁を整えるために書き込まれたものであろう。

次に，『二人の鑑』に収録されている10通の手紙の内容をごく簡単に紹介する。

中核をなす2通の手紙はいずれも甥ギラルドゥス宛であるが，取り上げる対

象は違っており，第1の手紙が甥自身，第2の手紙はその補佐役ウィリアムである。

第1の手紙に記されたギラルドゥスの主張は次の諸点に整理できる(30)。

① 甥は自分がカンタベリー大司教を交わした「約束」に違反する行為を重ねている。特に，自分が取得すべき収入を甥は渡そうとせず，私物化している。

② 自分はこれまで甥のために尽力してきた。にもかかわらず，甥は恩をあだで返した。

③ 甥の行動は自分に損害を与えているが，それだけでなく，聖職者あるいは人間が遵守すべきモラルに反している。

④ 甥は生れつき品性下劣である。彼の父方のいとこはみな立派な人物であることを考えると，彼の下劣な性格は母方の血統に由来するものであろう。

⑤ 甥は今からでもその性格をため直す努力をし，そのためにはまず「約束」に従って大助祭職禄を自分に分譲すべきである。

⑥ 甥は大助祭の任務を担うだけの学識をまだ備えていない。今後の勉学が大切であるが，彼はこの点についても自分の忠告を無視してきた。

以上6点はいずれも経験，学識に富む叔父が先輩聖職者として，未熟で性格のゆがんだ甥を教え諭す内容である。しかし，これは表面的なレトリックであり，手紙の真の目的は彼が自分のものと考える収入源を取り戻すことにあった。実際，引退後の彼にとってブレコン大助祭の職禄は，ぜひとも確保したい重要な収入源であった。甥への手紙を読み進めると，建て前の裏に潜む本音が見えてくる。

中核部分第2の手紙でギラルドゥスはウィリアムについて以下の点を上げ，非難している(31)。

① ウィリアムは，自分が南ウェールズを離れていて所領を直接監督できないのを利用して，本来自分が取得すべきいくつかのの所得を横領した。

② ウィリアムは，自分が甥の教育費として渡した金を彼自身のために流用

した。

③ ウィリアムは，自分の貸金を勝手に回収して横領し，また，不当な旅費を要求した。

④ ウィリアムは，甥をよい聖職者に育てて大助祭の職を遂行できるようにする責任を負っているのに，甥に悪事をそそのかし，2人で私腹を肥やすことばかり考えている。これは明らかに契約違反である。

⑤ ウィリアムは，自分の預けた印章を勝手に使用している。

ギラルドゥスの挙げるウィリアムの悪行はいずれも何らかの意味でギラルドゥスの損失につながっているが，大部分はごく小規模なものである。しかし，彼はウィリアムが雇い主である自分を裏切って甥を悪行に誘ったと断定し，大事件であるかのように記している。

付属部分の8通の手紙はギラルドゥスが1208年から1214年にかけて書き送ったものである。何らかの意味で彼が「ブレコン大助祭問題」に関係すると判断したから収録したのであろうが，今日では関連性が不明のものも含まれている。

付属第1の手紙はヘレフォード教会参事会員であったアルビヌス（Albinus）師に宛てたもので，同教会が甥とウィリアムを歓待したことに抗議し，自分を貶めるような2人の話に耳を傾けないよう求めている。アルビヌス師はギラルドゥスの古い友人であった。この手紙が書かれたのはギラルドゥスが甥たちの行動に疑惑をもった少しあと，おそらく1208年だと推測されている(32)。

付属第2の手紙はヘレフォード教会に所属する3人，参事会長ヒュー・ド・マペノール（Hugh de Mapenor），聖歌隊先咏者ウィリアム（William），参事会員ラルフ・フォリオット（Ralph Foliot）宛てに書かれている。ギラルドゥスは，まず第1の手紙と同様に，同教会が甥とウィリアムを歓待したことに苦情を述べ，自分が甥宛に送った手紙が同教会では甥たちの主張を裏付けるものと理解されているようだが，こうした誤解をすぐに改めてほしいと求めている。執筆，送付の時期は1210年から1211年の間と推定されている(33)。

第3の手紙はリンカーン大聖堂教会のチャンセラーであったウィリアム・ド・モンティブス（William de Montibus）師に宛てたもので，ギラルドゥスは自分の著作に関するウィリアムの書評に反論している。ウィリアムはギラルドゥスのアイルランドに関する2著作に大きな価値を認めず，むしろ神学の研究に専念すべきだと批評したようで，これに対してギラルドゥスはアイルランドおよびウェールズに関する自分の著作は完全なオリジナルで，他からの借用でない点が重要なのだと主張している。この手紙は少なくとも表面的には「問題」に関する言及がなく，ギラルドゥスがなぜこれを『二人の鑑』に収録したのか分からない。なお，ウィリアム師はギラルドゥスがパリ留学以来親しくしていた友人である。執筆の時期はウィリアムが司教であった1213年以前としか分からない(34)。

第4は聖ステファヌス祭のために書かれた説教の序文であり，ここにも「問題」への言及はない。説教本文が失われていることもあって，ギラルドゥスがこの文章を選んだ理由は分からない。また，執筆年代も不明である(35)。

第5の手紙はブレコン修道院長ジョン（John）に送られたものである。ジョンは「問題」と直接かかわりをもっていなかったが，ギラルドゥスと親しい関係にあったと推測される。ギラルドゥスは第三者であるジョンに対して，事情を理解してもらうために甥に送った手紙の写しを同封したので，ブレコンで甥が言いふらしていることと手紙から分かることを比較してどちらの主張が正しいか判断してほしいと記している。加えて，自分は被害者であり，甥たちの発言は悪意に満ちた中傷であると強調している。全体としてこの手紙は冷静な口調を保っており，彼の他の手紙に比べるとバランスの取れた事情説明がなされている。執筆時期は1210年末から1211年初めの間と推定されている(36)。

第6の手紙はセント・デイヴィズ司教ジョフレイに送られたものである。ギラルドゥスはこの手紙の中で，まず次の2点を挙げてジョフレイを非難している。①司教は立場上自分と甥との争いを公平に裁く仲裁者になるべきなのに，その責任を果たさず甥の味方をしている。②教会財産を独断で外へ譲渡するな

ど，司教が本来とめるべき行為を自ら行っている。次に，ギラルドゥスは司教に対して，甥からの情報に惑わされずに事実をよく認識し，正しく問題を解決してくれるよう求めている。この手紙は1211年に書かれたと推定されている(37)。

第7の手紙はサンソニー（Llathony）修道院長宛に書かれている。修道院長の名は記されていない。また，この修道院は元来東ウェールズのサンソニーにあったもので，1136年頃グロスター教会内に移転されていた。この修道院長がギラルドゥスの知人であったことは間違いないが，「問題」とのかかわりはなかったようで，手紙の中でギラルドゥスは一連の事件を順序だてて簡潔に説明している。説明はギラルドゥスの立場からなされており，強いバイアスがかかっているが，「問題」発生以後の経過を知る大きな手がかりとなる。1213年頃に書かれたと推定されている(38)。

第8の手紙は第6の手紙と同様にセント・デイヴィズ司教ジョフレイ宛のものであり，次の2点を挙げてジョフレイとの対決姿勢を鮮明にしている。①ジョフレイは教会財産の勝手な譲渡，聖職売買など重大な誤りを犯しており，罷免されるべきである。②そもそもジョフレイはウェールズ語に通じていないなど，能力の点でもセント・デイヴィズ司教にふさわしくない。この手紙が書かれた1213年末から1214年初めの時点で(39)，ギラルドゥスが司教の仲裁にもはや期待せず，甥と同様の敵対者とみなすようになっていたことが分かる。その意味で「問題」への直接的な言及は含まれていないが，重要な史料となる。

『二人の鑑』を「ブレコン大助祭問題」の史料として利用するのは容易ではない。それは，著者が以下のバイアスを合わせもっているからである。

① ギラルドゥスは「問題」の直接関係者であり，しかも，甥など対立相手が書いた文書がまったく残されていない。『二人の鑑』は甥たちの発言や手紙に言及しているが，いずれも引用ではなく，ギラルドゥスの解釈を踏まえて書き換えられている。したがって，当事者の一方，それも苦情を申し立てている側の情報だけで事件の内容を把握し，対立する2つの主張の

いずれが正しいか判断しなければならない。

②「問題」について論じる際にギラルドゥスは，正確かつ公平な記述よりも，自己主張に力を注いでいる。彼は対立者や第三者にしばしば事実を正確に認識するよう求めているが，その正確な認識とは自分の認識にほかならない。対立を含む事件であれば，筆者が誰であれ客観的に記述するのは難しいが，ギラルドゥスの場合はあまりにも自己主張が強すぎる。

③ 大部分の手紙でギラルドゥスは自分の苛立ちや怒りをむき出しにしている。冷静な部分もあるが，むしろ目立つのは感情の爆発である。

このようなバイアスはどうしたら克服できるのだろうか。本稿では，ひとつの試みとして以下の方法を採ることにした。

① リヒターの整理に従い，「問題」の経緯を大まかに把握する。なお，この作業はすでに第1節で済ませている。

②「問題」を構成する主要な事件についてギラルドゥスがどのように述べ，評価しているか，また，事件の責任を誰に帰しているか，彼自身の説明を紹介する。いわばギラルドゥスの「問題」認識の確認であり，この作業に必要な情報は『二人の鑑』に充分含まれている。

③ ギラルドゥスの記述から対立相手である甥の言動に関する言及を選び出し，甥が何を考えていたのか推定する。ギラルドゥスの理解や表現が大きな制約になっていることを承知の上で，甥の「問題」認識を探るのである。この方法で甥の認識が正確に分かるとは言えないが，ほかに方法がない状況であれば，試みる価値があると私は考える。成果は『二人の鑑』の記述からどれだけギラルドゥスのバイアスを取り除けるかにかかっている。

④ 甥だけでなく，彼の補佐役ウィリアムとセント・デイヴィズ司教ジョフレイについても同様な作業を行い，それぞれどのように「問題」を認識していたか推定する。その上で，彼らの認識と甥のそれとを比較し，彼らが共通の認識をもっていたのかどうか確認する。

⑤ ギラルドゥスの「問題」認識を他の3人のそれを比較することによって，

彼の記述の中で事実に即していると推定される部分を選別する。他の部分は彼が充分な根拠なしに主張している，あるいは，誇大な表現をしていると判断して，史料とするのを控える。

⑥ こうした作業によってで得られた信頼性の高い出来事をできる限り時間に沿って配列し，「問題」の経緯を再構成する。

⑦ 再構成された「問題」に照らしてギラルドゥスの記述を再検討し，彼のバイアスがどこに，どのようにかかっているか確認する。この作業によって「問題」をめぐる彼の思いを探ることも可能になる。

以上の説明からわかるように，私の方法は推測をいくつか重ねて進められるので，得られる結論も推測に域を出ないものになる可能性が高い。しかし，他によい方法が見当たらないので，以下の第 4 章から第 7 章では，この方法を利用して事実に近づく努力をする。

Ⅲ 「ブレコン大助祭問題」の原因

本節から「ブレコン大助祭問題」の検討を始め，第 7 節まで 5 つの節に分けて「問題」の紹介と検討を進める。各節の内容を短く記すならば，第 3 節は「問題」の原因，第 4 節は同じく発端，第 5 節はギラルドゥスの主張と行動，第 6 節は甥たちの主張と行動，第 7 節は「問題」の結果である。この 5 区分は第 1 節で紹介したリヒターの段階区分とほぼ重なっているが，ひとつ違いがある。それは，リヒターが第 2 段階を「問題」の発生，第 3 段階を「問題」の展開としているのに対して，本稿では「問題」の発生と展開をひとつにまとめた上で，これをギラルドゥス側から見たものと甥たちの側から見たものとに区分している点である。

一般的に言ってある事件を紹介するのにふさわしいのはリヒターの方法である。本稿があえて変則的な区分をするのは次の 2 つの理由からである。

ひとつは，『二人の鑑』が言及している個々の出来事の発生時点がほとんど

確認できないため，「問題」を当事者間のやり取りとして再構成するのが難しいからである。実際，「問題」の経過について発生と展開という2段階区分をしているリヒターも，「問題」発生が1208年であったことは確実だが，それ以外の出来事を具体的に確認するのは難しいと述べている(40)。

もうひとつの理由は，『二人の鑑』の記述には当事者によって違う強いバイアスがかかっており，これを削除するためには，まず当事者ごとにその主張や行動を整理し，その上で当事者間のやり取りを推定するほうが安全だと考えるからである。

本節の目的は上記のように「ブレコン大助祭問題」の原因を探ることにあるが，その前に前提となる事情，具体的には「問題」遠因である「セント・・デイヴィズ問題」について説明する必要がある。

説明は，まず両者の直接的関係について確認をすることから始めよう。

「セント・デイヴィズ問題」は1203年12月にギラルドゥスが敗北を認め，カンタベリー大司教ウォルターに許しを請うことでまずは決着した。ただし，大司教はこれでギラルドゥスとの争いを終結させず，ローマ教皇の要請も考慮して，彼にひとつの提案をした。勝者が敗者に対して温情を示しながら，以後のギラルドゥスの行動に枠をはめたのである。提案は受け入れられ，大司教とギラルドゥスとの「約束」として確認された。しかし，この「約束」は矛盾含みの内容をもっており，しかも，その内容についてギラルドゥスと甥がそれぞれ自分の利益になるように理解したため，新しい対立が生まれた。彼らの対立が顕在化したのが1208年であり，これが「ブレコン大助祭問題」の発端となった。このように，時間のずれはあっても「ブレコン大助祭問題」は「セント・デイヴィズ問題」根ざしているのである。

次に「セント・デイヴィズ問題」の経過と結果について紹介する(41)。なお，この問題が浮上したのは1199年に新しいセント・デイヴィズ司教の選出手続きが始まった時であるが，そこでギラルドゥスが展開した主張を理解するためには，彼がイングランド王宮を去り，著述生活に入った1194年から説明する

のが便宜である。

ギラルドゥスは，王宮勤めをやめてから「セント・デイヴィズ問題」が始まるまでの5年間，表面的には研究，著述に専念していた。しかし，実際には新しいキャリア・デザイン，すなわち，セント・デイヴィズ教会の大司教座権復興と自分の司教就任を組み合わせて教皇に訴え出るというプランの準備を進めていた可能性が高い。司教ピーターの死とともにチャンスが訪れると，同教会の主要メンバーが直ちにギラルドゥスと連携をとり，このプランに沿った動きを始めているからである。

彼らはまずギラルドゥスを実質上唯一の司教候補として推挙し，王宮やカンタベリー大司教が彼を拒否するならば，自分たちの要請をもって教皇に直訴すると言明した。当事者であったギラルドゥスはこの動きに参加せずリンカーンにとどまっていたが，これは過去の経験から自分が先頭に立つとイングランド王宮の反発を招くと知っていたからである。

他方，カンタベリー大司教はセント・デイヴィズ教会が推挙した司教候補者をすべて拒否し，代わりに自分の側近を含めた候補者リストを提出するよう要求した。当時のイングランド王権は国内の司教選定の手続きについてひとつの慣行を作り上げていた。すなわち，司教座教会は司教候補選出の際あらかじめ王宮の意図を打診しておき，これに反しない範囲で複数の候補を選んでリストを作成する，王は提出されたリストの中から意向にかなう者を選び，大司教が聖別するという手続きである。大司教はこの慣行を盾に，王宮が内諾を与えていない候補は受け付けないとしたのであるが，本当の狙いはギラルドゥスを候補から排除し，自分に忠実な司教を南西ウェールズにも配置することにあった。

セント・デイヴィズ教会のメンバーもこの点はよく承知していたから，大司教の命令を受けると直ちにこれを拒否すると宣言し，プラン通り教皇に訴えでて裁定を求めることにした。教皇の権威を支えとしてイングランド王宮の権力と対決する姿勢をとったのである。12世紀初頭以来イングランド王権の支配下にあったセント・デイヴィズ教会がこれだけ明確な戦術をもって王権に敵対

するのは初めてで，背後にギラルドゥスのリードがあったことはまず間違いない[42]。

ギラルドゥスが表舞台に立ったのはこの時点からである。彼はセント・デイヴィズ教会の代表としてローマへ向かった。

教皇インノケンティウス三世の裁定会議は4年にわたって3度開かれた。その詳細は先行拙稿に譲り[43]，ここでは裁定の場で取り上げられた論点と最終結果について簡潔に記しておこう。

ギラルドゥスを代表とするセント・デイヴィズ教会は次の2点を教皇に訴えでた。

① 自分たちが議論を重ねて推挙した次期司教候補をイングランド王宮は最大限尊重すべきであるのに，大司教はこれを無視し，自分の側近者を選ぶよう強制している。教会，司教区の管理者にとって配下の聖職者の信頼が何よりも重要であり，この点で最もふさわしいのは自分たちの推すギラルドゥスである。

② セント・デイヴィズ教会は創建者聖デイヴィッドの時代から大司教座の権威をもっていたが，アングロ・サクソン人によって襲撃された時にこれを失ったという経緯がある。古来の大司教座権を教皇の力で復興してほしい。

ギラルドゥスの作戦の特徴は①と②が密接に結び付けられている点にある。ともに教皇の権力増大の手がかりとなるという点で，世俗権力より優位に立とうとしていたインノケンティウス三世にとって好都合な主張であると彼は考えていた。また，①が実現すれば②の道が開けるし，逆に②が受諾されればセント・デイヴィズ教会がカンタベリー大司教の支配から解放される。ギラルドゥスが王宮を離れたあと数年かけてつくりあげたプランであった。

他方，カンタベリー大司教はその使者に託した手紙の中で次のように主張した。

① 12世紀初頭以来イングランド王は国内の司教選出について最終決定権を

もっており，司教区教会は複数の候補をリストにして提出する権限しかもっていない。

② ギラルドゥスは自分がセント・デイヴィズ教会参事会において満場一致で次期司教候補に選ばれたといっているが，これは疑わしく，確認されていない。

見られるとおり大司教は論点を次期司教選定の問題に絞っており，セント・デイヴィズ教会の大司教座権には言及していない。イングランド王権にとって国内司教の最終決定権を保持できるかどうかは重大な問題だった。また，この当時ヨーク教会との間で大司教座権の問題をかかえていたカンタベリー大司教はそれが他の司教座教会へ飛び火することを警戒したのである(44)。

教皇は仲裁者として振る舞い，この姿勢を最後まで崩さなかった。一時教皇はセント・デイヴィズ教会の大司教座権について興味を示し，かつてこの問題が教皇庁で取り扱われたことがあるのかどうか，あれば，どのような決定がなされているのか，ギラルドゥスが資料調査することを許した。しかし，これは結局ギラルドゥスへの好意表明にとどまり，全体として教皇はイングランド王宮の側に立って提起された問題を解決しようとしている。少なくとも王権に打撃を与えるような解決策をとる意図はまったくもっていなかった。

実際，教皇は早い段階でひそかにこの点を王宮に伝えていた。自分の政治力拡張にとってどちらに味方するのが得なのか，教皇にはよく分かっていた。論理的には，南西ウェールズに大司教座が設置できればこれを拠点として教皇がカンタベリー大司教の勢力拡大を抑制する可能性が生まれる。しかし，イングランド王権が新しい大司教座の設置に強く反対するのは明らかで，これと戦って論破する覚悟をしなければならない。両者を天秤にかければ，明らかに後者のほうが重大かつ現実的な問題である。したがって，この時点でギラルドゥスの戦略に乗るのは得策ではないと判断したのである。

ただし，教皇は正面からギラルドゥスの戦略を否定するのではなく，提起された2つの問題のうちまず次期司教候補をめぐる対立について先に審議し，大

司教座権の問題は当面扱わないという方法を採った。司教不在の状況を放置できないという点でこれは自然な選択であるが，2つの問題を結び付けて提出したギラルドゥスにとってこれは大きな誤算であった。スタートから戦略が崩壊する危険が生じたのである。ギラルドゥスは再度自分の要望を訴えたが教皇は受け付けず，最後まで大司教座権が本格的に審議されることはなかった(45)。

セント・デイヴィズ司教の選出に関してもギラルドゥスの予想に反する展開が見られた。彼は同教会で自分が候補に選定されたプロセスを説明すれば，これを踏まえて審議が進められ，教皇の正しい判定が下されると考えていた可能性が高い。他方，大司教側はギラルドゥスの候補選出自体を否定しようとしていろいろ画策した。すなわち，一方ではギラルドゥスより先に別人が候補に推されたという偽りの説明をし，これが教皇によって却下されると，そもそも同教会がギラルドゥスを推挙したことがないという偽証を教皇の前で行った。くわえて，大司教はセント・デイヴィズ教会へ使者を送り，教会メンバーに圧力をかけて反ギラルドゥス派を形成させた。

教皇は大司教側の説明に偽りが含まれていると察知していたが，深く追求せず，司教候補選出について事実調査をすることにした。これは大司教にとって好都合であった。調査の間にギラルドゥス派を切り崩すことができたからである。実際，教会内でギラルドゥス支持者は時とともに減少し続け，最後に教皇が裁定を下した時にははっきり少数派になっていた。

教皇の裁定は，一見公平だが，実際にはギラルドゥスにとってきわめて不利なものだった。教皇の判断では，セント・デイヴィズ司教候補選出に関するギラルドゥスの主張と大司教の主張はともに決定的証拠を欠いており，いずれが正しいか決定し難い。そこで，双方の要請を却下することとし，改めて司教候補の選出を行うよう命じたのである(46)。

この裁定によって形式上ギラルドゥスが司教に就任する可能性がなくなったわけではない。セント・デイヴィズ教会参事会が再度彼を司教候補に推挙することは可能で，手続きだけで言えばそこから司教への道が開ける。事実，裁定

を受けて1203年に行われた会議で彼の名が挙げられている。しかし，前年から進められていた大司教の工作の結果，教会内であえて彼を候補に推す人びとは大幅に減少しており，くわえて，仮に彼が候補リストに載せられても絶対に聖別しないという大司教の意向が周知のものとなっていたため，新しく大司教のもとに提出されたリストの中に彼の名はなかった。

ギラルドゥスはこうした状況，すなわち，自分が完敗したことを1203年の秋には充分理解していた。しかし，当然彼の心中は穏やかでなかった。当面は自分の気持ちを表すことはできなかったし，しなかったが，心の中の鬱積は大きかったと考えてよい。この不満が「ブレコン大助祭問題」の遠因となったのである。

教皇があえて取り上げなかった問題，セント・デイヴィズ教会の大司教座権については，カンタベリー大司教がギラルドゥスの主張を封殺し，彼に次のように誓約させた(47)。

① 以後ギラルドゥスはどのような職位にあっても，カンタベリー教会の利益に反してセント・デイヴィズ教会の大司教座権を要請しない。

② 今後誰か別人が大司教座権を要求するようなことがあっても，これに助言や支援を与えず，逆に可能な限り反対する。

③ ギラルドゥスは，セント・デイヴィズ教会の大司教座権要求に反対しているカンタベリー教会を全面的に支持すると表明する。

大司教の権力保持，拡大にとってセント・デイヴィズ教会の次期司教選出以上に危険をはらむと考えられていた問題はこうして決着がつけられた。実際，これ以後セント・デイヴィズ教会から大司教座権の要求が正式に出されることはなくなった。ギラルドゥスはどのような思いで上記の誓約をしたのか書き残していないが，彼の面目が完全につぶされたことは間違いない。人一倍自尊心の強かった彼が受けた屈辱は大きかったであろう。

ギラルドゥスがなすすべもなくカンタベリー大司教に屈服したのはなぜか。彼が「セント・デイヴィズ問題」追及で見せた粘り強さからみると意外な感じ

もする。理由は2つ考えられる。

① ローマ教皇の裁定が終わり，大司教権についてはっきりと反対している大司教と直接交渉せざるを得なくなった。

② 裁定が下されるより少し前にギラルドゥスはジョン王によって「王国の敵」に指名されており，これを早急に解除してもらう必要があった。

大助祭にすぎない彼が王権の中枢者を相手とするのであるから，いずれも容易に突破できない難関であったが，特に②は彼の生命・財産を脅かす問題で，一刻も早く解除してもらう必要があった。しかも，解除する力をもっていたのは，王自身は別として，大司教だけであった。どのような要求を突きつけられても大司教に逆らうことができない状況にギラルドゥスは陥っていたのである(48)。

他方，大司教はギラルドゥスの存在そのものを抹殺するために「王国の敵」という宣言を出すよう王に進言したのではなかった。大司教の意図はセント・デイヴィズ教会が彼の指導によってカンタベリー大司教の管理から離脱するのを阻止することにあった。この点は上で紹介した誓約が明確に示している。大司教はギラルドゥスの主張，行動を自らの権力，さらには，イングランド王権を侵害する危険な動きとみなしていた。したがって，彼が誓約を遵守することがわかれば，「王国の敵」という脅しは不要になる。おとなしく余生を過ごすのであれば，ギラルドゥスに温情を示す用意はできていた。くわえて大司教は，教皇から最終的裁定のいわば付帯条件として，今後のギラルドゥスの待遇に充分配慮するよう求められていた(49)。

以上から判断して，1203年暮れの大司教はギラルドゥスの処遇について2つの矛盾しかねない条件を抱えていたと推測される。ひとつは彼の影響力，発言力をセント・デイヴィズ教会から完全に排除すること，もうひとつは彼の老後の生活を何らかの形で保証することである。この2条件を同時に満たすために，大司教は長年ギラルドゥスが保持してきたブレコン大助祭の地位をどのように取り扱うのがよいか考えをめぐらせたと思われる。最大限の温情を発揮す

るのであれば，これまで通り大助祭の職と禄を保証するのがよいが，これではセント・デイヴィズ教会に対する彼の影響力を排除できない。上記のように，大助祭の職務の中には司教座教会の重要な政策を決め，司教候補を選出する役割が含まれていた。他方，ギラルドゥスから大助祭の職を奪えば，当然職録も没収されるので，彼の老後の生活維持が難しくなり，これでは教皇の要請に応えられない。ギラルドゥスの大助祭職をルールに従って処理しようとすると，2つの目的は相互に矛盾する関係に立つ。そこで大司教は，下記内容の妥協案を案出して矛盾を回避しようとした。ギラルドゥスにこの案が提示されたのは上記誓約書が提出されて間もなくの時点，1203年末か1204年初めであった。

大司教の案，すなわち，「約束」は5つの要素に分解できる。私の説明を付して紹介しよう。

① ギラルドゥスはブレコン大助祭の職を辞する。

形式上自発的に彼はこれまで享受してきた権限と収入を放棄するのである。

② 大司教はブレコン大助祭の地位をギラルドゥスの甥であるギラルドゥス・ド・バリイに与え，聖別する。

ギラルドゥスは，この当時の甥についてまだ経験不足で重要な聖職に就く力を充分備えていないと評価している。これを信ずれば，大司教は甥を大抜擢したことになる。当然大司教には何か特別の目的ないし意図があったと考えられ，それは叔父ギラルドゥスに対する配慮とみるのが自然であろう。

ただし，甥を後継者とする案が誰から出されたのかはっきりしない。ギラルドゥスは『二人の鑑』の中で，したがって，甥に対する彼の信頼が著しく低下した後の時点で，資質，経験ともに劣る甥を次期大助祭とすることに自分は一度反対したと述べている。これを信用すれば，大司教から提示された案をやむなく受諾したことになる(50)。しかし，大司教が南ウェールズの下位聖職者に関して詳細な情報をもっていたとは考え難いので，ギラルドゥスの側から何らかの働きかけや示唆があった可能性も否定できない。もしそうならば，ギラルドゥスは教皇の大司教に対する要請を利用して，少しでも自分に有利な後任者

を得ようとしたことになる。

私の推測が事実無根でないことは次の③，④からもうかがえる。大司教は明らかにギラルドゥスと取引をしている。

③ ギラルドゥスは若く経験の浅い甥を指導，補佐する。

④ それにともない，ギラルドゥスはブレコン大助祭職禄の一部を自分の取り分として引き続き享受する。

この2点が実現すればギラルドゥスは，以前に比べてかなり減少するとはいえ，自分の威信と収入を保持できる。大司教にとってはかなりの妥協であるが，教皇の要請に応え，ギラルドゥスの不満を押さえ込むという意味で，妙案といってよい。ただし，言うまでもないことであるが，①，②と③，④は矛盾する性格をもち，そこから「約束」全体が崩壊する可能性があった。

「約束」の実効性は直接関係者がどれだけ遵守する意志をもっているかにかかっていた。関係者は「約束」を結んだ者と実行する者とに分けて考えるのが便宜であろう。具体的には，大司教とギラルドゥス，および，ギラルドゥスと甥という2組である。

まず，大司教は「約束」の提案者であるから当然遵守されると信じていたであろう。ただし，ギラルドゥスの影響力を南ウェールズから排除したいという最大の目的は③，④のために部分的にしか達成されていないので，ギラルドゥスが再びセント・デイヴィズ教会の自立を求めて人々を説得する危険性が完全に消えたわけではない。この危険を未然に防ぐにはどうしたらよいか，これが大司教に残された問題であった。

ギラルドゥスが大司教提案を喜んで受け入れたことは間違いない。「王国の敵」という汚名から解放されて生命の危険がなくなっただけでなく，③，④によって文筆家として生活することが保証されたからである。彼も「約束」に表と裏があり，両者は矛盾する可能性をもつことに気づいていたはずであるが，あえて指摘しなかった。大司教との力関係からすれば，指摘することはできなかった。おそらく，①，②は建て前であり，③，④が確保できればよい，また，

③，④の確保は自分が甥を指導する立場にいるのだから間違いなくできる，と考えたのであろう。

しかし，事態は彼の楽観的な予測に反する方向に進んだ。しかも，彼がこの事態に気づいたのは4年後，1207年末であった。

甥にとって「約束」は思いがけぬ賜り物だったと思われる。彼は生来決して明敏な人物ではなく，叔父の引き立てなしに栄達をはかることはできなかった。その叔父が失脚したのであるから，「セント・デイヴィズ問題」終了時に彼の前途は閉ざされていたといってよい。そこへ叔父の後継者としてブレコン大助祭に昇進する話が舞い込んだのである。大司教の案を大歓迎したはずである。

ただ，甥は大司教とギラルドゥスが「約束」を交わした場にいたわけではなく，「約束」が矛盾しかねない利害を調整するためにつくられたことを充分理解せぬまま受諾した可能性が高い。すなわち，甥は③，④がもっている意味を正しく理解できず，②に焦点を当てて期待をふくらませていたと思われる。おそらく彼は大助祭に就任してから問題に気づき，③，④によって自分が思うように大助祭区の管理ができない仕組みを改めるにはどうしたらよいか考え始めたのであろう。

Ⅳ　発端

第2節で紹介したように，『二人の鑑』は「ブレコン大助祭問題」の経過全体を記した上で個別の出来事に言及するという叙述をしていない。これは緊急の手紙が中核になっている史料であれば仕方のないことであろう。しかし，ギラルドゥスの頭の中では，当然のことながら，「問題」を構成する一連の出来事が整理されていたはずで，それを思わせる記述がひとつだけある。サンソニー修道院長宛の手紙に含まれているものである。この修道院長はギラルドゥスの友人であったが，事情に疎かったようで，説明が必要だったのである。内容は以下の6点にまとめることができる(51)。

① ギラルドゥスはブレコン大助祭職禄のなかで自分が取得すべき分を甥が渡そうとしないことが分かった時に，セント・デイヴィズ司教ジョフレイに対し甥に注意して不当な行動をやめさせるよう依頼した。

② しかし，司教は彼の訴えを取り上げず，甥をとがめてその不正な行動を止めようとしなかった。

③ ヘレフォード教会参事会の長はギラルドゥスとカンタベリー大司教との「約束」について事情をよく知っていた。その参事会長が人々の前で現在甥が所有している職禄は本来ギラルドゥスのものであり，甥が策略をめぐらせて奪い取ったのだと証言したが，司教はこれも無視した。

④ 甥とウィリアム・ド・カペラはギラルドゥスが司教に訴え出たことを知ると直ちにブレコン教会へ行き，配下の聖職者に対してギラルドゥスが昔の権利を振りかざして不当な要求をしているが，これに取り合わないようにと言い渡した。それだけでなく，ブレコン近郊のサンディウ（Llanddew）にあったギラルドゥスの家，所領，を没収すると公言した。

⑤ ついで，甥とウィリアムはセント・デイヴィズ教会へ行き，ブレコン大助祭職禄中のギラルドゥスの取得分をすべて没収すると宣言した。

⑥ 司教は甥のこのような行動を充分承知していたにもかかわらず，これを止めようとしなかった。そこでギラルドゥスはローマ教皇に事の次第を記した手紙を送り，裁定を得ようと考えたが，実行しなかった。

見られるとおり，ここに含まれている情報量はさほど多くなく，記されている出来事が相互にどのような関係をもっているのかはっきりしない。史料として利用する者からすれば①～⑥が「問題」の経過を順次記したものと考えたいのであるが，年月は記されておらず，出来事の順序も確定的ではない。

しかし，ほかに手がかりがない史料状況を考えると，ここから「問題」の大まかな経緯を引き出すことは許されるであろう。実際，第1節で紹介したようにリヒターは「問題」の発生，発展，終結という3つの段階をこの手紙を基にして設定している。また，本稿がリヒターの段階区分を利用しながら，それに

多少手を加えて，「問題」の原因，「問題」の発端，ギラルドゥス側から見た「問題」，甥の側から見た「問題」，「問題」の結果という章立てにすることは前節で説明した。

この枠組みを上記①～⑥に当てはめるならば，本節のテーマである「問題」の発端は①，②，④の背後にあった出来事を探る作業である。

1204 年以降のギラルドゥスは，少なくとも表面上は，聖界から引退して著作に専念する姿勢を見せていた。カンタベリー大司教によって聖界での栄達を断念させられた彼にとって，残された目標は著述家としての名声を得ることだけだった。「セント・デイヴィズ問題」で敗北した痛手は確かに大きかった。しかし，残された道も地味ではあれ，明るい展望を用意していた。彼は若い時から卓越した著述家になる希望をもっており，すでに何点か自信作を発表していた。強いられた引退であったが，年来の願望をようやく達成する絶好の機会と考えることもできた。

ただし，願望実現のためには文筆生活を支えるに足る収入の確保が必要であり，その意味で大司教との「約束」，特に，彼がブレコン大助祭辞任後もその職禄のかなりの部分を享受できるという点は重要であった。甥の指導を通じて大助祭区の管理に参与できることになっていたが，彼はこれを職禄ほどに重視していなかった。実際，彼は辞任後 1204 年から 1207 年にかけてアイルランドやローマに長期滞在し，ウェールズを離れていた。当然この間は甥の直接指導は不可能で，大助祭の職務は甥とその指導・補佐役のウィリアム・ド・カペレに一任されていた。彼は在任中もしばしば配下の者に大助祭区の管理を委ねており，甥についてもこれまで通りのやり方でよいと考えたのであろう(52)。

「ブレコン大助祭問題」はギラルドゥスが自分のものだと信じていた収入を甥が渡さないことから始まった。リヒターは「問題」が発生したのは 1208 年初めだったと推定している(53)。ただし，後に紹介するように甥は「問題」につながる行動を大助祭就任直後から始めていた可能性が高いので，むしろ 1208 年はギラルドゥスが甥の行動に初めて気づいた年と考えるほうがよい。

大助祭職禄は数箇所の所領からの収入からなり，実際に納められる額は年によって変化したから，甥たちが多少の不正をしても，それを遠隔地にいるギラルドゥスが直ちに発見するのは難しかった。彼がローマ巡礼を終えてリンカーンに落ちついたのは1207年の冬であり，その後自分の収入について調べた時に気付いたのであろう。

リヒターによれば，ギラルドゥスが初めて気づいた異変は甥たちの言動ではなく，セント・デイヴィズ司教ジョフレイの不正行為であった(54)。ギラルドゥスのローマ滞在中に司教がブレコン大助祭の職禄から数マークを無断流用したのである。ギラルドゥスは抗議の手紙を司教に送り，司教は返書でギラルドゥスに対して甥とともにセント・デイヴィズ教会まで来るよう求めた。直接会って不当な流用でないことを説明するというのである。リンカーンにいたギラルドゥスはたまたま彼のもとに来ていた甥とともに司教の手紙を読み，要請を断ることにした。司教の流用額よりもセント・デイヴィズ教会までの往復旅費のほうが高く，得策ではないと判断したからである(55)。

反対に甥は，ギラルドゥスの忠告にもかかわらず司教の説明を聞くことにし，ウィリアムを伴ってリンカーンを出発した。なぜ彼はこのような行動をとったのか。建て前を言えば，現職の大助祭としてその職禄が失われるのは金額にかかわらず重大な問題で，問いただすべきだと判断したことになろう。しかし，司教と面会したあとの彼らの行動から判断すると，甥たちはギラルドゥスと対決に備えて司教の意向を確認する目的をもって出かけた可能性が高い。

甥たちはセント・デイヴィズへの途上ヘレフォードで司教に会って説明を聞き，了承した。司教と大助祭が話し合って了解したのであるから，問題解決である。しかし，面談はこれで終わらず，大助祭は自分の職禄の一部を叔父ギラルドゥスから要求されて困っていると司教に訴えた(56)。この時点までに甥が職禄をめぐってギラルドゥスと対決する覚悟を決めていたことは間違いない。実際，甥たちはヘレフォードからブレコンへ向かい，配下の教会メンバーに対しても叔父を非難する発言をしている。彼は職禄の分配，したがって，「ブレ

コン大助祭問題」について教会メンバーの理解を誘導し，支持を取り付けようとしたのである。

リンカーンにいたギラルドゥスはこうした甥の行動をいわば宣戦布告と受け取ったのであろう，その後ブレコンから事情説明にやってきた甥を門前払いしている。以後二人は激しい非難合戦に突入した。ギラルドゥスが『二人の鑑』の中核をなす2通のオリジナル手紙を書き始いたのはこの時期であったと推定されている(57)。

「ブレコン大助祭問題」の発端について分かっていることは以上で尽きているが，もうひとつ「問題」の発端にかかわる私の推測をつけ加えておこう。それはギラルドゥスが，甥の上記行動に不審をいだくまでは甥を信頼していたと考えられる点である。少し説明しよう。

まず，前提となる事実，すなわち，ギラルドゥスがカンタベリー大司教と結んだ「約束」には矛盾含みの事項が含まれていたことを再度確認しておこう。「約束」は，一方でブレコン大助祭の職は甥が引き継ぎ，他方でその権限と職禄の一部をギラルドゥスの手元に残すことになっており，厳密に解釈すれば矛盾する2つの条件から成り立っていた。「約束」自体の中に大助祭の権限と職禄をめぐって二人の利害が対立してもおかしくない要因が含まれていたのである。

ただし，この対立を顕在化させずにギラルドゥスが自分の利益を守る方法がなかったわけではない。そのためには次の2つの条件のいずれか，できれば両方が満たされる必要があった。ひとつは，彼が直接甥の大助祭区管理，特に職禄の管理を指導することである。指導を進める中であれば自分の取り分を確保するのはさほど難しくない。もうひとつは，甥が何らかの理由で自分の利害以上にギラルドゥスの意向を尊重しなければならないと考えていることである。そうしたいわば心理的圧力が生まれるためには，甥がギラルドゥスの引き立てによって大助祭に就任できたことを恩恵と受け止め，叔父に対して強い感謝の念をもっている必要があった。

しかし，現実には2条件ともに満たされなかった。第1の条件について言えば，前に紹介したようにギラルドゥスは1204年から1207年後半まで南ウェールズを離れていた。自分で指導する代わりに，彼は私費でウィリアム・ド・カペラを雇って甥の指導と補佐を依頼し，二人に仕事をすべて委ねてしまった。

第2の条件について言えば，ギラルドゥスは格別の配慮と考えていたが，甥には恩義を受けたという認識はほとんどなかったようである。実際，ギラルドゥスは『二人の鑑』の中で繰り返し甥の忘恩を嘆いている(58)。

では，なぜギラルドゥスは第1の条件を無視して「約束」成立後の数年間ウェールズを離れたのか。私は彼が第2の条件が充分満たされていると考えたからではないかと推測する。彼はジェラルディン一族に対して基本的に強い信頼と誇りをもっており(59)，甥に対しても当初は同じ気持ちで接したはずである。もしギラルドゥスが最初から甥の能力や品性に疑問をもっていたのなら，甥たちに大助祭の職務を一任するのではなく，何か自分の取り分を確保する手立てを講じてもよいところであるが，こうした手配をしたという記述はまったくない。後に『二人の鑑』の中で中傷といってもよいほど甥を酷評しているのも，当初彼が甥に対してもっていた信頼が裏切られたからであろう。

信頼感は相互的なものであるから，ギラルドゥスと同様甥についても検討すべきである。しかし，これはギラルドゥスの場合よりも複雑だったようで，彼の言動を示す史料を細かく見たうえで判断したほうがよい。後に第6節で改めて取り上げる。

参照文献

Ⅰ　史料

（A）ギラルドゥスの著作と訳本

［1］Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae（in Dimock, James E.（ed.）: *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6, H. M. S. O., 1866.）（『ウェールズ案内』）

［2］Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae（in Dimock, James E.（ed.）: *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6, H. M. S. O., 1866.）（『ウェールズ旅行記』）

[3] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambernsis,* vol. 5, H. M. S. O., 1867.)（『アイルランド地誌』）

[4] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 5, H. M. S. O., 1867.)（『アイルランド征服』）

[5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 1, H. M. S. O., 1861.)（『自叙伝』）

[6] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.)（『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』）

[7] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.)（『ヨーク大司教ジョフレイ伝』）

[8] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O., 1863.)（『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』）

[9] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978.（『アイルランド征服』）

[10] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920.（『論駁』）

[11] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974.（『二人の鑑』）

[12] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.)（『ウェールズ案内』）

[13] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978.（『ウェールズ案内』）

[14] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.)（『ウェールズ旅行記』）

[15] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales, Penguin Books,* 1978.（『ウェールズ旅行記』）

[16] Giraldus Cambrensis: Topography on Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of*

Giraldus Cambrensis), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
[17] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
[18] ギラルドゥス・カンブレンシス（有光秀行訳）:『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
[19] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
[20] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis* (*1145～1223*), Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)

Ⅱ 研究文献

[21] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079～1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
[22] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146～1223*, Clarendon Press, 1982.
[23] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe. (in [54])
[24] Brooke, Christopher N. L. : The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk. (in [25]).
[25] Brooke, Christopher N. L. : *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
[26] Charles-Edwards, T. M. : Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
[27] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
[28] Davies, J. Conway: Giraldus Cambernsis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46.
[29] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093～c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
[30] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063～1415*, University of Wales Press, 1987.
[31] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.
[32] Edwards, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*,

John Murray, 1912.
[33] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
[34] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec. (in [69]).
[35] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St.David of Wales, Cult, Church and Nation,* Boydel Press, 2007.
[36] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [35]).
[37] Holmes, Urban T.: The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanisitica*, new series, vol. Ⅰ, 1970.
[38] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.
[39] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095～1291*, University of Wales Press, 2011.
[40] Isaac, G. R.: The Cult of St. David. (in [35]).
[41] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
[42] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. Ⅵ, no. 3, 1950.
[43] Kightly, Charles: A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188. Cadw, 1988. (和訳書 [77])
[44] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [69]).
[45] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067～1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
[46] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
[47] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretationsof the Welsh Middle Ages, c. 1860～1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.
[48] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
[49] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to he Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
[50] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
[51] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea*

and Brecon Historical Essays, Christpher Davies, 1974.
[52] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
[53] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
[54] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007.
[55] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [33])
[56] Rees, J. F.: *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.
[57] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
[58] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
[59] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
[60] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [35])
[61] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David (in [35])
[62] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
[63] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
[64] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063～1283*, Longman, 2002.
[65] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentaion by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
[66] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [51])
[67] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書 [76])
[68] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
[69] Walker, R. F. (ed.): Pembrokeshire County History, vol. Ⅱ, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
[70] Walker, R. F.: The Earls of Pembrokeshire, 1138～1379. (in [69]).
[71] Williams, A. H.: *An Intoroduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
[72] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
[73] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [51])

[74] Wooding, Jonathan M. : The Figure of David. (in [51])

[75] 有光秀行『中世ブリテン諸島史ーネイション意識の諸相』，刀水書房，2013 年。
[76] D. ウォーカー（編）（木下智雄（訳）):『ウェールズ教会史』，教文館，2009 年。
[77] C. カイトリー（和田葉子（訳）):『中世ウェールズをゆくージェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』，関西大学出版部，1999 年。
[78] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズー独立をかけた戦い」（青山吉信 編著『世界歴史大系　イギリス史Ⅰ　先史～中世』，山川出版社，1991 年）。
[79] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」，『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号，2009 年。
[80] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 59 巻 1 号，2010 年，第 59 巻 2 号，2011 年。
[81] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号，2011 年，第 60 巻 2 号，2012 年。
[82] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第 62 巻 2 号，2014 年，3・4 号，2014 年。
[83] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）」『国学院経済学』第 63 巻 1 号，2014 年，第 63 巻 3・4 号，2015 年，第 64 巻 2 号，2015 年。

註（第 1～4 節）

第 1 節

(1)　Giraldus [11].

(2)　これを単なる事件とみなさず「問題」を表現する理由は，本節後半で説明する。

(3)　永井［81］を参照。

(4)　Giraldus (Richter) [11], pp. xv～lxvi. 以下でリヒターが書いた『二人の鑑』の序論を指す場合には，このように（Richter）を付して区別する。

(5)　これまでの研究者の「問題」理解は本節後半で紹介する。ここでは，必ずしも彼らが積極的に記しているわけではないが，取り上げ方から推定される理解の特徴を挙げておく。

(6)　ギラルドゥスのキャリア・デザインについて簡単に説明する。彼は第 1 回パリ留学中に生涯の目標を 2 つ定めた。ひとつは聖職者としての栄達で，具体的にはセント・デイヴィズ司教となることをめざしていた。もうひとつは文筆家としての名声で，若い時からよく古典を学び，多くの著作を発表していた。さらに，「セント・デイヴィズ問題」を立ち上げる段階でひとつ目標を追加した。それは，セン

ト・デイヴィズ教会がかつて保持していたと伝えられる大司教座を再興し，それを手がかりにカンタベリー教会の支配を脱してウェールズ教会を自立させるというプランであった。彼は「セント・デイヴィズ問題」で自らの司教昇進と教会の大司教座権再興を結びつけ，ローマ教皇の力を利用して実現を図ったが，これに反対するカンタベリー大司教ウォルターに敗れ，まったく成果を得られなかった。永井［82］，［83］.

(7)　永井［83］，第7節。

(8)　ギラルドゥスは「セント・デイヴィズ問題」について教皇の裁定が下された後も司教候補に2度推されている。1203年に教皇の裁定に基づいて作られた司教候補リストに彼の名が記されていたが，イングランド王宮に提出される段階では削除された。2114年に司教ジョフレイが死去した時に再び彼の名が挙げられたが，リストに記載されずに終わった。

(9)　Giraldus (Richter)［11］，p. xxxiii.

(10)　Owen［50］，pp. 25～28.

(11)　Richter［59］，p. 389.

(12)　Richter［58］，p. 124.

(13)　Walker［68］，p. 61.

(14)　Kightly［43］，p. 98.

(15)　ギラルドゥスの人物評価は研究者の間で大きく分かれているが，「ブレコン大助祭問題」に言及するのはいずれも彼を好意的に評価している研究者である。

(16)　Giraldus (Richter)［11］，pp. xxx～xxxix.

(17)　永井［82］.

(18)　永井［83］.

第2節

(19)　彼ら，特に司教ジョフレイは「問題」をギラルドゥスの私的な争い，それも，老人の不満表明に過ぎないとして処理したかったのであろう。

(20)　『二人の鑑』はprima pars，secunda pars，epistolarum parsの3部構成となっている。この編成もギラルドゥスのものである。

(21)　Bartlett［22］，p. 219. なお，リヒターは，『二人の鑑』は序文を欠いているので未完の書ではないかと推測している。しかし私は，形式はともかく，少なくとも内容的には完成していると考えている。執筆の状況から判断して，これ以上彼が書き足したとしても新しい情報が盛り込まれた可能性はほとんどない。Giraldus (Richter)［11］，p. xxii.

(22)　1690年に教皇アレクサンダー三世がスエーデンの王妃クリスティーナ図書館から購入した。これより前の所有者は不明であるが，余白の書き込みから，17世紀初めに死去したオルレアンのペトウ（Petau，P.）が所有していた可能性が指摘

されている。Giraldus (Richter) [11], p. xv.

(23)　リヒターは暫定的な判断として 9 種類の筆跡に区分し，各筆写生の担当部分を挙げている。Giraldus (Richter) [11], p. xix.

(24)　Giraldus (Richter) [11], pp. lviii～lxvi. ただし，リヒターは第 2～第 4 の 3 段階だけを挙げており，第 1 段階は当然のこととして省略した説明になっている。

(25)　Giraldus (Richter) [11], pp. xxv～xxvi.

(26)　Giraldus (Richter) [11], pp. lviii～lix.

(27)　Giraldus (Richter) [11], pp. xxi, lviii.

(28)　Giraldus (Richter) [11], pp. lix～lxiv.

(29)　Giraldus [11], pp. 152～153.

Speclum ergo latum et grande missum est vobis, in quo vultus suos ambos, nature tamen magis quam nativitatis, simul poterunt doctor et discipulus contemplari.

(30)　以下の内容整理はリヒターの理解を参考にしている。Giraldus (Richter) [11], pp. xxxv～xxxvii.

(31)　以下の内容整理はリヒターの理解を参考にしている。Giraldus (Richter) [11], pp. xxxvi～xxxvii.

(32)　Giraldus [11], pp. 156～159. Giraldus (Richter) [11], p. xl.

(33)　Giraldus [11], pp. 160～167. Giraldus (Richter) [11], pp. xl～xli.

(34)　Giraldus [11], pp. 168～175. Giraldus (Richter) [11], pp. xli～xlii.

(35)　Giraldus [11], pp. 176～189. Giraldus (Richter) [11], p. xlii.

(36)　Giraldus [11], pp. 190～207. Giraldus (Richter) [11], pp. xlii～xliii.

(37)　Giraldus [11], pp. 208～241. Giraldus (Richter) [11], pp. xliv～xlv.

(38)　Giraldus [11], pp. 242～261. Giraldus (Richter) [11], pp. xlv～xlvii.

(39)　Giraldus [11], pp. 262～283. Giraldus (Richter) [11], pp. xlvii～xlix.

第 3 節

(40)　Giraldus (Richter) [11], p. xxxiii.

(41)　永井 [83], 第 5～第 9 節。

(42)　彼自身はセント・デイヴィズ教会メンバーから強く要請されたため司教候補となることを決めたと記しているが，事実はむしろ逆であったと推定される。永井 [83], 第 4, 第 5 節。

(43)　永井 [83], 第 6～第 8 節。

(44)　永井 [83], 第 6 節。

(45)　永井 [83], 第 6～7 節。

(46)　永井 [83], 第 9 節。

(47)　この誓約書は 1203 年末か 1204 年初頭に作られたと推定されている。原文は

Richter［58］, pp. 135～136に収録されている。Giraldus（Richter）［11］, p. xxxviii.

(48)　永井［83］, 第9節。

(49)　永井［83］, 第9節。

(50)　Giraldus［11］, pp. 194～195.

第4節

(51)　Giraldus［11］, pp. 256～257. Giraldus（Richter）［11］, p. xxxiii.

(52)　ギラルドゥスは大助祭の時期でもしばしば自分の職務を配下の聖職者にゆだねている。特にイセナルド（Ithenard）は彼の代理人に指名されていた。彼らは忠実に職務を遂行し，ギラルドゥスに迷惑をかけることはなかった。Walker［68］, p. 67.

(53)　Giraldus（Richter）［11］, p. xxxii.

(54)　この情報はアイヴェル（Eifael），マェリエニズ（Maelienydd），ビエスト（Buellt）など他の教会に所属するギラルドゥスの友人たちから伝えられた。Giraldus（Richter）［11］, p. xxxii.

(55)　Giraldus［11］, pp. 246～247. Giraldus（Richter）［11］, p. xxxii.

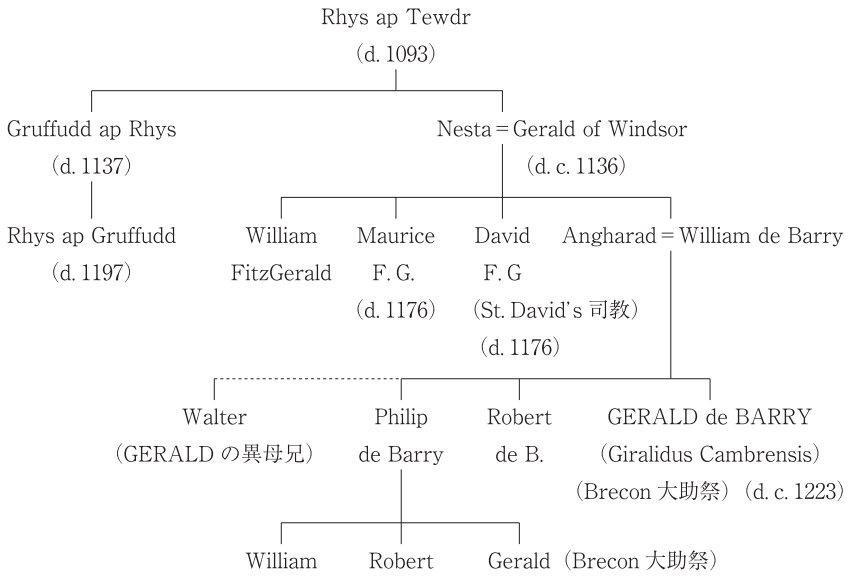
(56)　Giraldus［11］, pp. 28～29. Giraldus（Richter）［11］, p. xxxii.

(57)　Giraldus（Richter）［11］, p. xxxiii.

(58)　第5節で事例を紹介する。

(59)　永井［81］, 第4節。

ギラルドゥスの家系（母方を中心に）



ギラルドゥスと同時期の高位聖職者（＊はギラルドゥスと関係が深い人）

カンタベリー大司教

Lanfranc（1070～1089）
Anselm（1093～1109）
Ralph（1114～1122）
William（1123～1136）
Theobald of Bec（1139～1161）
Thomas Becket（1162～1170）
Richard of Dover（1174～1184）
Baldwin（1184 or 1185～1190）（＊）
Reginald FitzJocelin（1191）
Hubert Walter（1193～1205）（＊）
Reginald（1205）
John of Gray（1205～1206）
Stephen Langton（1206～1228）

セント・デイヴィズ司教

Sulien（1073～1078）
Abraham（1078～1080）
Sulien（1080～1085）
Wilfred（1085～1115）
Bernard（1115～1148）
David FitzGerald（1148～1176）（＊）
Peter de Leia（1176～1198）（＊）
Geoffrey de Henlaw（1203～1214）（＊）
Iorwerth［Gervase］（1215～1255）